

「全鍍連」 2021年 3月号 いきいき地域

全鍍連情報・国際委員 藤田 泰三 (株)エフテックス 代表取締役)

「ヒットの背景には」

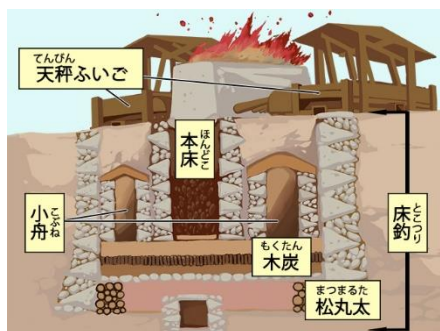
日本映画の歴代興行収入ランキングで「鬼滅の刃」は1位、観客動員数2400万人、それとは別に25年前に公開された宮崎駿監督の「もののけ姫」は7位だそうである。我々にはどちらかと言えば縁遠い映画だが、2編ともアニメーション映画である。

先日の日本経済新聞には今年度「鬼滅の刃」のコラボ商品販売を含め少なく見積もっても2千億円超になり、コロナ禍で企業の業績が悪化する中、その波及効果は無視できず関連企業も熱い視線を注ぐとある。

ここで突然ですが、読者の皆様は「たたら」という言葉をご存じでしょうか。言うまでもなく「たたら製鉄」のことを指しますが、実は先のアニメーションの内容をご存じの方はお分かりだと思います、この二つの映画と「たたら」は非常に関係が深いのです。

中国表面処理工業組合の山陰、岡山、山口、広島の4県(地区)の特に山間部では、古くから良質な砂鉄を原料とする「たたら製鉄」が盛んであり、その遺構も多く残っている。

近年文化庁により「出雲國たたら」が人と自然が共生する持続可能な産業として日本を支えてきたと認定、日本遺産に登録された。また先日私も訪れた奥出雲町にある「たたら刀剣館」が所蔵している、古代鉄から造られた黒色の日本刀が話題を集めている。



今大ヒットしている「鬼滅の刃」の作者がモデルにしたのではないかと思える程、まったく同じ形の黒い刀が以前からそこに展示されていることから、連日多くの人がこの黒刀を見るために同館を訪れている。

出典：「近世たたら仕組み」

また先の二つの映画にはこの「たたら場」の場面が克明に描かれおり、女たちが4日5晩「ふいご」を踏み続け純度の高い鉄を作る過酷な労働の場面が、より一層演出を際立たせていることも面白い。

そもそもたたら製鉄とは古代から近世にかけて発展した製鉄法で、「たたら（ふいご）」により炉内に風を送り多くは砂鉄を木炭の熱で還元し純度の高い鉄を生産する。しかしながらその製鉄方法も19世紀初頭には成熟期を迎え、その後大量に生産される安価な現代鉄に押され市場価値を失ってしまった。

当時出雲藩と共に広島藩でもたたら製鉄は盛んだった。その良質な鉄を利用して刀鍛冶や鋳物等の生産が発達し、例えば鉄から縫針製造等を生み出し、さらに産業の近代化に伴い機械製造の発展につながったと考えられる。

こうした素地に加えて造船業に伴う錨や鋌等の加工品、繊維業の発展を背景に、織機製造から機械工業が発展し、その後ある時には軍需産業などにつながり、産業集積を加速させたことも興味深く、機会があればぜひ当地で「たたら」の歴史に触れていただきたい。